

現代英語のなかに見るアメリカの高校生活と教育理念

—英語科での意味論レベルでの異文化理解教育の試み(Ⅱ)—

大西 博人

(前号に続く)

3. 表彰主義

アメリカの学校では、成績や生徒会活動からスポーツや地域活動に至るまで多様な賞が設けられ、表彰式が盛んである。まず成績面では、小学校から大学まで優等生名簿が作成され、優等賞が授与される。

(12) ... Students who fail to make *the honor roll* but manage to show progress receive a VIP card, which recognizes them as a Very Improved Person. At some schools the cards entitle students to on-campus perks. — *Time*, May 16, '94, p.31

これは高校での優等賞の記述であるが、honor rollを逸した生徒でもVIPカードを与えて学業成績の進歩を評価している。このようなカードが、学校内での特典がつくという高校もあると述べているところが、実利を伴うことで生徒の努力に報いようとする学校の姿勢が明確に出ている。

表彰の目的は、生徒にやる気を起こさせ、進歩が見られた生徒を表彰することでその努力と進歩に報いることである。V高校^(注1)では、特に重要な2つの表彰式があった。1つは、卒業式の約1週間前の夜に、卒業生を対象とした優秀生徒の表彰である。これは、各科目別表彰とリーダーシップ、スポーツマンシップ、誠実さなど数項目を対象とした生徒活動表彰の2分野から成り立っている。該当する生徒と家族が中心となる行事である。もう1つは、同じ日の午前中を短縮授業にして、体育館に全校生徒を集めて行われる各種奨学金授与式である。奨学金は、地域社会の企業独自の基金や個人の寄付によるコミュニティ奨学金基金から成り、10数種類にも及んでいる。その地域で選出された奨学金委員が「どれくらい人に尽くしたか、どれくらい顕著な成果を上げ

たか」という基準で選考している。その授与額は、100～1000ドルの幅があり、一括支給されている。これらの表彰が在校生の励みになっていることは明らかであった。

このような大きな表彰以外に、V高校では、数多くの身近な賞が用意されていた。例えば、毎月末に校長が全教師に理由を添えて推薦を求め、選考し授与する“Student of the Month”という賞がある。これも、その月で「最も顕著な成果を上げた生徒」に敬意を示し、表彰するものである。このように、何かの進歩、優れたこと、成果などを生徒の中に「探すようにして」褒めるのがアメリカの学校の特徴であるように思える。これは、賞だけが褒める手段であるというのではなくて、アメリカでは教師は生徒を褒める機会を狙っていて、機会あるごとに授業中や校内で生徒を褒めるという教育理念が下地としてあり、それが明確な形態を取ったのが多種多様な表彰であるとするのが妥当であろう。フリー・ジャーナリストの多賀幹子氏は、「学校の教師は、生徒の長所を見つけ出す“名人”である。子供を褒めるチャンスがないかと、ウの目タカの目で探している印象さえある」^(注2)と述べられているが、まさに的を射た鋭い観察であると思う。

優秀生徒表彰は、大学でも行われている。各学期末や学年末に、大学当局がある基準以上の成績を修めた学生を選び、作成する優等生名簿(dean's list)がある。

(13) ... The couple moved into a house on Long Island, New York, and had a son. Enrolled in a local community college, Ferguson made *the dean's list* three times. — *Time*, Dec. 20, '93, p.17

優秀生徒の表彰は、大学では少なくなっているよ

うであるが、アメリカの学校制度全体に一貫して流れている。このように賞が重要な位置を占めているのは、結果重視の実利主義のためである。これは、勤勉と儉約により裕福になることが善であると説いたベンジャミン・フランクリンと、裕福になることが神の意志であるとするジョナサン・エドワーズが説いた新カルビン主義とが融合し、アメリカの資本主義の発展に大きく寄与したアメリカの功利主義に由来している。しかし、大学入試が容易なアメリカの高校生に、学習に対する動機づけを与えるために、賞が大きな役割を果たしていることも事実であろう。

アメリカの学校制度には、優秀生徒に賞を与えるだけでなく、学年を早める「飛び級」がある。

(14) ... Kelly was thirteen, like the other seventh-graders, but Arby was only eleven. He *had already been skipped two grades*, because he was so smart. And there were rumors he would be skipped again. Arby was a genius, particularly with computers. — Michael Crichton, *The Lost World*, Arrow '96, p.51

(15) And with a touch of her own pride, she told him, “I *skipped a year*. I’ll be sixteen and a half when I graduate.” — Belva Plain, *Daybreak*, A Dell Book '95, p.35

最初の例は、中学生の場合で、すでに2度飛び級をしており、もう1度飛び級をするという噂がある天才コンピュータ少年についてのものである。2つ目は、飛び級のために1年早く卒業する女子高校生の場合で、それを誇らしげに人に語っているところである。この「飛び級」は、同級生に決定的な時間の差をつけるという点で、数ある賞の中でも最高のものと言えるであろう。この制度には、「独創性」を尊重するアメリカ人の価値観が潜んでいる。ノーベル賞大国アメリカを支える基盤をここに見る思いがする。

ノーベル賞小国日本も、アメリカのこの制度を取り入れようとする動きが見られる。千葉大学が、全国初の「飛び級入学制度導入」を決め、工学部で物理の分野に秀でた高校2年終了者を受け入れると発表した^(注3)。資源小国日本が、国益のために基礎科学

を重視し始めたものと受け取ることができるが、今後この試みが日本の教育制度の中でどうなっていくのかは、注目される場所である。

アメリカの学校では、学習成績だけでなく他の活動分野も重要な評価の対象となっている。スポーツは、学校の部活も地域のチームも含めて、日本以上に盛んでありその優れた成果は高く評価される。そのため、高校生は季節に応じて複数のスポーツ・チームに所属して1年中スポーツを楽しんでいる。学校では、対外試合に出場する選手のために、授業を短縮して短時間であるが体育館で頻繁に pep rally (壮行会) がもたれている。この壮行会も、広い意味での授賞式とみなすこともできる。

(16) There was a *pep rally* in the gym after school. Frasch got the biggest hand when they introduced the basketball team. Dave and I have been friends for so long that it’s hard to imagine the fact that he is now the official Bexley High School hero. — Bob Greene, *Be True to Your School*, Ballantine Books '88, p.313

このディスコースでは、壮行会が放課後にもたれているが、おそらく大きなバスケットボール大会のためであろう。ここに“the official Bexley High School hero”とあるように、スポーツで成果を上げると「英雄」という賞が壮行会という表彰式の場で授与されるのである。そして、その賞は級友の羨望の的となっている。

以上述べてきたように、アメリカの学校では、生徒の進歩や成果をできるだけその場その場で褒めて評価し、かつ賞という具体的な形で表彰することが広く実践されている。その賞は、教師による褒め言葉やカードに書いた文面だけにとどまらず、金銭的な報酬(奨学金)や、早期卒業(飛び級)や、全校生徒による拍手と敬意(壮行会)といった具体的な裏づけを伴うことを特徴としている。これらの教育活動の中に見られる表彰主義は、実利主義や功利主義を基盤としたアメリカ人の価値観の1つの現れと解釈できる。

4. 罰則主義と accountability

アメリカの教育現場で、生徒の優れたところを褒

める表彰主義と表裏一体をなして罰則主義が厳然として遵守されているように思える。各学校では、生徒行動規則が体系的に決められている。これは日本の生徒指導規則や校則に相当するものであるが、アメリカのものは正確に法体系に基づいて作成されていて学校間には大きな違いはない。そこには、生徒が違反した場合にはどのような処罰が課せられるかが、累積違反ごとに明記されている。規則違反が多いのが tardiness (遅刻) である。以下のディスコースは、遅刻の罰則について触れている。

(17) ... She was hurrying because Beau had honked twice and, thanks to her she said, they had been late for school three times this month with *a week's detention* hovering as punishment on the next *tardiness*.
— V. C. Andrews, *Ruby*, Pocket Books '94, p.305

この学校では、遅刻をすると毎月4回目から1週間の detention (放課後の拘束) が罰として生徒に課せられる。detention は、通常、放課後 30～50 分程度別室で拘束され、当番教師の監視の下で課題を自習することになっている。tardiness は、朝の登校時のときだけでなく、各授業へのときも厳格に記録されて3回の警告の後、4回目から detention が課せられている。

V 高校では、生徒が遅刻した場合はオフィスでカードを受け取り記入し、入室時に授業担当教師に手渡す。遅刻理由を示す親のメモ (parent's slip) が無い遅刻には、3回の警告後4回目から1週間以内に detention を消化しなければならない。detention は各教科担当教師が detention card を発行し、直接教頭に渡す。該当生徒は、電話ボックスよりやや広い、机と椅子が備え付けてあるいくらかの個室のうちの1つで、放課後30分間教頭の監視の下で、出された課題を自習することになっている。30分の放課後の拘束は、4回の遅刻の罰として厳しいものがある。生徒は、detention を極度に嫌っている。1つには、スクールバスに間に合わなくなり不便を被るからである。また、1つには、30分でも余分に身柄を拘束されることには、自由の国のアメリカ人としては耐え難いことであるからであろう。更に、遅刻が改善されないと、生徒・クラス担当教師・親との

早朝会合、次にはカウンセラー、教頭、校長と徐々に参加者が多くなる会合が段階的にもたれる。そして、最後に来るのが退学処分である。

罰則主義は、頻繁に利用される色の違った card や pass (許可証) を通して遂行されている。パスは、用件等を記入した後サインをして該当生徒に発行するが、生徒は用件が済み次第、返却することになっている。次の場合は、授業中にトイレに行くパスについてである。

(18) The next period I had study hall. I got *a rest room pass*, and I was on my way to the boys' room when I heard a voice call my name. It was Mr. Schacht.
— Bob Greene, *Be True to Your School*, Ballantine Books '88, p.90

自習時間であっても、その監督の教師がトイレ・パスを発行しているのである。都市中心部の学校によっては、トイレは休憩時間の間は鍵がかけられていて、授業中にパスを発行してもらって用を足すところもある。これは、トイレが密室であるため非行や犯罪が起こる可能性があり、その防止のためだそうである。

生徒規則は、強い拘束力を持ち、違反生徒に対する罰則を厳しく遂行している。ここでは、主に遅刻を例として説明したが、生徒の学校生活に関するあらゆる面まで違反には責任をとらせるという罰則主義が行き渡っている。このシステムは、勿論、罰を与えるための罰ではなく、将来の一アメリカ市民として自分の行動に責任をとるべきことを教えるものであることは言うまでもない。責任をとる態度は、accountability という1語で表されるが、この引責態度は生徒だけに限らず親と教師にも求められている。その1つの場が、Open School Night であると考えられる。

(19) Mandy? "There was a Mandy who was in my son Ben's year in high school. The only other Mandy I've ever even heard of is a lawyer. She runs with one of my neighbors. But I've never met her; they run when she gets home from the city." Could Richie have met this woman

at some *Open School Night*? — Susan Isaacs, *After All These Years*, Harper Paperbacks '94, p.218

Open School Nightとは、普通、新学期が9月に始まりしばらくした頃、夜にもたれる各教科担当教師とその生徒の保護者との授業ごとの短時間の会合であり、生徒も出席できる。各教師は自分の授業についての計画・方針・評価基準などを説明し、保護者の質問や苦情に答えるという教師の accountability が問われる「戦場」といえる。V高校では、Open House と呼ばれていて9月22日(木)7:30p.m. から1回15分間で6クラス分計6回の会合がもたれ、クラス間の移動時間は各3分で、終わったのは9時頃であった。筆者が教えていたのは日本語、日本文化(2クラス)、世界地理の4時間であったので4回生徒の親と対面したが、日本関係の3クラスについては困った質問はなかったが、世界地理に関しては2、3の厳しい質問が出たことを覚えている。「授業の重点項目や評価基準ははっきりわからない。」とか「学期を通しての授業計画を明確にしていない。」といった質問であった。これらの親に納得のいく返答を、不自由な英語であることを求められたわけである。日本の学校では、公の場でこのような質問をされることはない。アメリカの学校では、これが教師が生徒の保護者に対して責任を取るシステムなのである。

教育行政も、親に対して責任を取っていることは言うまでもない。その1つが、school bus であると思う。日本人の感覚からすると、大きくなっている高校生に至るまで生徒の登下校にスクールバスを用いることは、過保護であるだけでなく税の無駄遣いであると映る。尤も、親が車で送り迎えする家庭もあり、自分の車で通学する高校生もいる。しかし、教育権を市民に保証するためにはどの家庭の生徒にも安全な通学を保証しなければならない、というのがアメリカの教育行政の姿勢である。スクールバス制度は、生徒の教育権と安全に対する教育行政の accountability を象徴的に示している。次の場面は、放課後の校庭での風景である。

(20) They went outside into the sunlight, the sounds of the girls thankfully drowned in the noise of everyone going home.

Yellow school buses were in the parking lot. Kids were streaming down the steps to their parents' cars, which were lined up all around the block. There was a lot of activity. — Michael Crichton, *The Lost World*, Arrow '96, p.53

平和な風景であるが、ここでもし親が車を発進すると問題が起こる。スクールバスが校内にいる間は、生徒の安全確保のために誰も車を動かさないのである。また、道路でスクールバスが停車しているときは、車両はバスを追い越してはならず、その後ろで停止していなければならないのである。これらすべて生徒の安全のためである。

アメリカの学校では、生徒に対する罰が厳しく、責任も求められるが、同時に、大人の側での生徒の安全確保に対する責任も重視されている。一口に言うと、社会の鉄則 accountability を生徒に植え付けるのがアメリカの教育活動の核を占めているということになる。

5. まとめ

アメリカの学校での教育理念が表れていると思われる語(句)レベルの文化記号を含むディスコースを紹介し、同時に、筆者の経験を交えながらアメリカの高校を中心にして、学校生活の諸相がもつ意味を解釈してきた。ディスコースとして取り上げた中の語句は、アメリカ人にとっては当然のことであり何の特別な価値ももたない。彼らにとっては、これらの語句の背後にある前提は「あたりまえの前提」であるからである。しかし、異文化に暮らす日本人にとっては、その前提は見過ごされがちである。異文化理解教育を英文テキストを用いて行う場合の1つの参考として、これらの語句をアメリカの文化記号と捕らえ、その表象する意味の解釈を試みた。

まず、大学入試においてGPAとSATの2つの語句のもつ記号的な意味を考え、同時に、進路指導の実学主義的な実態を明らかにした。次に、アメリカの学校現場での学校行事である Homecoming, Prom Night, Commencement に沈殿している価値観や、show and tell や food fight に込められている文化記号的な意味を明らかにした。これらの語句は、アメリカの学校が生徒に期待している価値

観を含んでいることが判明した。その価値観は、行動主義と自立主義である。

更に、日本の学校と比較して、アメリカの学校では賞と表彰が盛んであることの中に、また、飛び級や壮行会の中にも「生徒の優れている面を積極的に評価し褒める」というアメリカの教育理念が潜んでいると結論づけた。しかし、「褒める」という優しい面だけでなく「罰する」という厳しい面もある。遅刻に対する罰や、校内で発行される多種多様な許可証に罰則主義が存在している。この罰則主義は、表彰主義と同様に、その根底に自己の行動の責任をとる accountability, つまり、「引責主義」が横たわっている。将来のアメリカ市民として大切な価値観の1つが accountability であり、その価値観は教育の場で植え付けられているのである。

しかし、学校は実社会と異なり、生徒は教育行政により保護されている。その保護を象徴するのがスクールバスである。日本では、児童生徒は各自の交通方法で登校するが、アメリカでは1920年代に公教育が確立した当初からスクールバス制度が存在している。

高校を中心にしてアメリカの学校現場を考察してみると、教育活動が「優れた面は褒め」、「規則違反は罰し」、「保護すべき面は法的に制度化する」といったように「原理原則」に基づいて営まれている印象が強い。アメリカの学校がそれに基づいて動いている原理について、梶田正巳氏は「信賞必罰と行動主義という2つの原理である。前者は、ルールに違反したり悪い行いをしたら、相応の罰を必ず科す。また、良い行い、立派な業績、優れた成績、誇りとなる行為には、校内に知らせて、記念品や賞金を贈ったり、特別なクラブの会員に推薦して顕彰するのである。」(1997: 197)と述べられているが、まさに的確な指摘であると思う。

本稿では、語(句)という意味論レベルの文化記号を取り上げ、その背後に潜む価値観を解釈し、日本人には見えにくいアメリカの学校での教育理念及び価値観を明らかにすることを試みた。結論としては、アメリカの学校も社会の一部として、アメリカの理念と価値観を教えるという大きな文化的使命を担っている。最後に、繰り返しになるが、英文テキストを用いて異文化理解教育を行う場合、日本人にとって何気ないと思える語句にも文化が沈殿しており、それらを解釈し生徒に説明してやるのが英語教師に課せられた使命ではないであろうか。

〈注〉

- (1) 筆者が1988-89年度交換教師として勤務した米国ワシントン州 King County の Vashon Island High School で、以下 V 高校と略した。
- (2) 「米教育の褒め上手 見習うべき点多い」(『読売新聞』1990年5月4日所収)。
- (3) 『神戸新聞』1997年8月3日所収。

〈参考文献〉

- D'Andrade, R. G. "Cultural Meaning Systems." *Culture Theory*. Ed. Richard A. Shweder and Robert A. LeVine. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Geertz, C. *The Interpretation of Culture*. New York: Basic Books, 1973.
- 梶田正巳 (1997) 『異文化に育つ日本の子ども』中央公論社。
- 高橋健男 (1993) 『アメリカの学校 規則と生活』三省堂。

(兵庫県立舞子高等学校教諭)